巻頭言

「十一月を迎えるに当たり思うこと」

沼崎富 ◉ 公益財団法人日本吟剣詩舞振興会会長

十一月と言えば、私の人生の大半を占める吟詠生活の中で、より特別な思いのある月でございます。昭和五十三年、父の跡を継ぐべく、当時勤めておりました会社を退職し、東京都吟剣詩舞道総連盟に加入致しました。併せて、上部団体である財団法人日本吟剣詩舞振興会及び、東日本地区連絡協議会の各事業に従事して参りました。

先ず始めに、毎年、十一月初旬に開催された、財団法人日本吟剣詩舞振興会主催、全国吟剣詩舞道大会が、日本古来の荘厳な佇まいの日本武道館に於いて、全国から吟剣詩舞道家が一同に集い披露された、日本最大の大会が思い起されます。

そして、東日本地区連絡協議会主催、東日本地区吟詠指導者特別研修会が思い起されます。毎年、笹川鎮江二代会長、音楽家・舩川利夫先生をお招きし、アクセント並びに吟詠の音楽芸術としての向上や、コンクールの採点方法の実技指導を受けて参りました。

今となっては、どちらも大変懐かしく、様々な経験をさせて頂きました。新組織体制となりましてから、一年半が過ぎようとしておりますが、皆様方には未だ戸惑われることもお有りと存じます。健全なる事業運営を推進して行くためには、これまでのように会場の確保が容易ではございません。

そのような中、今後、各事業の開催地が大幅に変更されて参りますので、どうかこの現実をご理解頂き、引き続き、ご支援ご協力を賜わりますよう宜しくお願い申し上げます。

なお、現在、財団本部では、吟剣詩舞道和歌集の制作に取り掛かっている最中でございます。吟詠専門委員会が中心となり、万葉集を始めとし、近代までの和歌を取捨選択している処でございます。後日、また、進捗状況をお知らせ致します。

日本財団助成事業

令和四年度全国剣詩舞コンクール決勝大会
令和四年度全国吟詠コンクール決勝大会

日時：令和4年9月18日(日)、19日(月・祝)
場所：赤羽会館・講堂、日本教育会館・一ツ橋ホール
主催：公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会

台風を跳ね返す コンクールへの想い

吟剣詩舞の「聖地」と言われた笹川記念会館が老朽化による工事のため、剣詩舞と吟詠が別会場での開催となった全国コンクール。新型コロナウイルスの影響により、吟詠の近畿地区大会が中止となって近畿勢が不参加。また開催の2日間、日本列島を台風14号が直撃するなどアクシデントに見舞われましたが、全国から集まった幼年から一般三部までの老若男女が元気いっぱいに舞い、吟じ、日頃の練習の成果を存分に発揮しました。

吟詠の会場となった日本教育会館・一ツ橋ホール。客席数802のきれいなホールで、来年もここで開催予定

青年剣舞で優勝した五月女智仁さん。昨年の詩舞に続いての連続優勝だが、剣舞で6年連続2位という苦境に打ち克っての悲願達成であった

今年も名勝負、それぞれの矜持を賭けた青年の部の激闘

令和四年度全国剣詩舞コンクール決勝大会

初日の全国剣詩舞コンクールは、東京都北区の赤羽会館で開催。これまで東日本地区大会が開催されるなど、東日本の剣詩舞家にとってはなじみのある会場です。

多田正稔副会長による開会の辞に始まり、国歌斉唱と財団会詩合吟は感染防止対策の一環として黙唱で実施。続いて沼崎富会長が「ご来場の皆様には芸術的・音楽的に進歩した剣詩舞道の今日像をご理解いただき、一人でも多くの方に斯道に親しんでいただきたい」と挨拶しました。

大会は剣舞幼年・少年からスタート。吟剣詩舞界の明日を担う少年少女たちが、舞台狭しと元気いっぱいに舞います。詩舞幼年・少年が終わって昼食休憩後結果発表。少年の部では愛知の堀姉弟が平成30年度の幼年の部に続いて同時優勝を果たしました。

一般三部・二部の剣舞・詩舞に続き最後は一般一部・青年の剣舞・詩舞。青年の部は毎年スーパーチームメンバーを中心に激戦が展開されますが、剣舞で6年連続2位となった後に詩舞に転向、昨年詩舞優勝を果たした五月女智仁さんが見事に悲願の剣舞優勝を達成。詩舞は8年ぶりに出場した長澤美元さんが優勝、スーパーチームの2人が栄冠に輝きました。

全国剣詩舞コンクール決勝大会結果

[剣舞]幼年の部

優勝	鈴木嗣人	(愛知)
2位	齊藤柚璃	(兵庫)
3位	小野愛琉真	(栃木)

[詩舞]幼年の部

優勝	塙 寛介	(愛知)
2位	水口葉月	(愛媛)
3位	石川琳梨	(茨城)

[剣舞]少年の部

優勝	堀 真大朗	(愛知)
2位	永田菜桜	(愛知)
3位	松田卓也	(兵庫)
4位	安藤 翔	(岡山)
5位	松田侑也	(兵庫)

[詩舞]少年の部

優勝	堀 真悠子	(愛知)
2位	西浦 輝	(愛知)
3位	古田琉舞	(大分)
4位	畑本彩結	(岡山)
5位	植原李香	(京都)

[剣舞]青年の部

優勝	五月女智仁	(栃木)
2位	上岡隆生	(三重)
3位	友井川 友	(兵庫)
4位	石川姫麗	(愛知)
5位	杉浦きよ乃	(愛知)

[詩舞]青年の部

優勝	長澤美元	(愛知)
2位	原 光希	(兵庫)
3位	増井康二	(兵庫)
4位	入倉真之将	(愛知)
5位	柴田 譲	(愛知)

[剣舞]一般一部

優勝	鈴木宏実	(愛知)
2位	坪田里美	(愛知)
3位	石田泰範	(大分)
4位	中田加奈子	(愛知)
5位	髙橋 博之	(群馬)

[詩舞]一般一部

優勝	林 亮志	(愛媛)
2位	小嶋和美	(京都)
3位	入倉仁美	(愛知)
4位	永井聡多	(愛知)
5位	伊藤修司	(愛知)

[剣舞]一般二部

優勝	鈴木一人	(茨城)
2位	建部 司	(愛知)
3位	西原 香	(兵庫)
4位	大久保昌良	(愛知)
5位	濱岡眞澄	(京都)

[詩舞]一般二部

優勝	渡邉祐子	(静岡)
2位	五月女益美	(栃木)
3位	百田あゆみ	(京都)
4位	牧 清美	(愛知)
5位	三角園幸重	(岡山)

[剣舞]一般三部

優勝	鈴木文枝	(愛知)
2位	津村恵子	(長崎)
3位	竹口敦子	(道央)

[詩舞]一般三部

優勝	金屋俊枝	(広島)
2位	蜂須賀記代子	(愛知)
3位	田中トミコ	(愛媛)

Family 家族で優勝、入賞!

五月女母息子
「息子の優勝がうれしい」と母

昨年の詩舞青年に続いて悲願の剣舞優勝を果たした息子の智仁さん。お母さんの益美さんは詩舞一般二部2位。平成30 年度には剣舞で母が優勝、息子が2位で今回は逆の結果となったが、「もちろん自分より息子が優勝したほうがうれしいです」と母の情を見せた。

松田兄弟
ともにシンバ役を務めた兄弟

剣舞少年で3位と5位になった兄弟。兄の卓也さん(左)が高校3年、侑也さん(右)が高校1年。青柳流の先輩で昨年剣舞青年優勝の原光希さんに憧れ、原さんと同じく劇団四季の『ライオンキング』で2人ともシンバ役を務めた。剣詩舞は3年前から始めてうれしい同時入賞。

堀姉弟
幼年に続き2度目の同時優勝

日本壮心流の気鋭の姉弟。姉の真悠子さんが昨年の剣舞少年に続いて詩舞少年優勝。弟の真大朗さんが剣舞少年優勝。平成30年度の幼年の部で、姉が剣舞で、弟が詩舞で優勝した時に続く同時優勝。真大朗さんは昨年全国大会に進めなかった雪辱を果たした。

鈴木母息子
息子初優勝、母二冠達成

昨年15年ぶりにコンクールに出場して詩舞一般一部で優勝。今年は剣舞優勝、最短2年で二冠達成した鈴木宏実さん。『鬼滅の刃』が好きな長男の嗣人君は、小学3年でコンクール初出場にて優勝。「全然予想してなかった」(宏実さん)とうれしい親子優勝となった。

幼年・少年・青年の部優勝者の横顔

＊名前が赤字は文部科学大臣賞

剣舞で6年連続を含め7回2位となり、詩舞に移って昨年優勝。「剣舞はあと1回だけ」と語ったが項羽の心情を見事に表現して悲願達成。

剣舞青年の部 優勝

五月女智仁さん(栃木)

演題「垓下の歌」

幼年では剣舞も詩舞も全国制覇している14歳の逸材。少年の部へは2度目の挑戦で栄冠。姉の真悠子さんとの同時優勝に「うれしい!」

剣舞少年の部 優勝

堀 真大朗さん(愛知)

演題「那須与一宗高」

コンクール初挑戦にして優勝の小学3年生。お母様は剣詩舞スーパーチームを卒業したばかりの鈴木宏実さん。今大会は親子同時優勝。

剣舞幼年の部 優勝

鈴木嗣人さん(愛知)

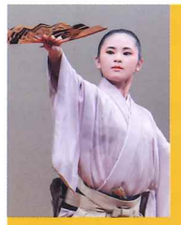
演題「那須与一宗高」

平成26年度に詩舞少年で優勝後、地元を離れて稽古ができなかったために大会から遠ざかっていたが、8年ぶりに出場して一発優勝。

詩舞青年の部 優勝

長澤美元さん(愛知)

演題「梅花絶句」



昨年剣舞で優勝を果たした16歳は、詩舞では初出場だが「自分なりに一番の詩舞を」と笑顔で舞台へ。姉弟で少年の部を制覇する快挙。

詩舞少年の部 優勝

堀 真悠子さん(愛知)

演題「応制天の橋立」

昨年は剣舞幼年の部で優勝し、今年は詩舞へ初めてのチャレンジ。緊張した舞台だったが、優勝を聞いた時は思わず「よっしゃー!」

詩舞幼年の部 優勝

塙 寛介さん(愛知)

演題「和歌・ふるさとの」

一般一部・二部・三部優勝者の横顔

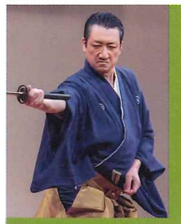
＊名前が赤字は文部科学大臣賞

大病より復帰し、一般三冠達成。「流派の宗家のお陰です。それに仲間、家族、皆さんが力を貸してくれた。本当に嬉しいです」

剣舞一般三部 優勝

鈴木文枝さん(愛知)

演題「垓下の歌」



青年の部、一般一部に続く戴冠。「一般二部の年齢になり20数年ぶりのコンクールでした。まさか初挑戦で優勝できるとは」

剣舞一般二部 優勝

鈴木一人さん(茨城)

演題「中庸」

昨年詩舞で優勝、「自信がない」と言っていた剣舞に挑戦して連続優勝。長男の嗣人君の優勝を見届け、晴れ晴れとした気分で舞った。

剣舞一般一部 優勝

鈴木宏実さん(愛知)

演題「北庄懐古」

「今日は自然体で舞えなかったと思っていたので、優勝できてびっくりです」。昨年2位だった雪辱を果たし、念願の全国制覇。

詩舞一般三部 優勝

金屋俊枝さん(広島)

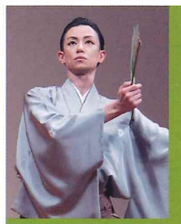
演題「生田に宿す」

コンクール復帰2年目で栄冠に輝く。「後進指導に徹していましたが、若い子に教えてきたことが自分を成長させてくれたのかも」

詩舞一般二部 優勝

渡邉祐子さん(静岡)

演題「漢江」



剣舞が中心になる男性としては珍しく「流派に剣舞がないので」詩舞専門。日本舞踊で培った表現力も活かした舞で初優勝を飾った。

詩舞一般一部 優勝

林 亮志さん(愛媛)

演題「和歌・あさみどり」

幼年・少年・青年の部優勝者の横顔

＊名前が赤字は高松宮妃記念杯

7歳頃から詩吟を始めて念願の全国初優勝。現在九州大学大学院で「観照的実践としての吟道とマインドフルネス」の研究をしている。

吟詠青年の部 優勝

本田陽彦さん（福岡）

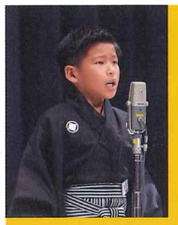
吟題「秋思」

幼年から数えて5度目の決勝大会で悲願の初優勝。変声期真っただ中の高校2年生が「自分らしい吟を」と鍛錬し、栄冠に輝く。

吟詠少年の部 優勝

鈴木愛琉さん（群馬）

吟題「江南の春」



お母様は岩永優岳少壮吟士。コンクール初出場ながら「全国優勝するつもりで来ました」と、大舞台にも動じず有言実行の小学4年生。

吟詠幼年の部 優勝

岩永克衛さん（長崎）

吟題「九月十日」

一般一部・二部・三部優勝者の横顔

平成28年の一般二部に続き二冠目獲得。「感激です。本当に有り難い。これでコンクールは卒業ですが、正直ほっとしています」

吟詠一般三部　優勝

中村利江子さん（香川）

吟題「春暁」

「二部のトップバッターで緊張しましたが、いつもの稽古場での自分の吟をと心がけました」。不惑過ぎて始めた吟が全国一に。

吟詠一般二部 優勝

髙橋恵子さん（福島）

吟題「望湖楼酔書」

一般一部初出場にて優勝。「3年前から出られたましたが職業柄（小学校教師）コロナ禍での出場は自粛してました」。娘さんも幼年準優勝。

吟詠一般一部 優勝

綿谷未由子さん（三重）

吟題「蘇台覧古」

母の背中を追って

吟詠コンクールでは毎年少壮吟士など有名吟詠家の子弟が活躍するが、今年も幼年の優勝者と準優勝者は、お母さんの背中を追って練習に励んできた子供たち。このほか原田光玲子少壮吟士の次女・原田愛子さんが少年の部で2位、和田彩楓青研吟士の長男・大野統也さんが昨年に続いて青年の部で2位となった。

幼年優勝：岩永克衛くんの母は岩永優岳少壮吟士

幼年優勝の岩永克衛くんのお母さんは第四十一期少壮吟士の岩永優岳さん。「幼稚園年長の頃から一応詩吟を始めたんですけど、あまり熱心ではなく（笑）。それが昨年はじめのコンクール予選に急に「出る」と言いだして、やっとやる気を出しました。ちゃんと練習したのはこの1年くらいですね」（優岳さん）。「最初に出た大会で優勝しました」（克衛くん）と、はじめて出場した流派の選考会で優勝して火がついたようだ。

幼年準優勝：綿谷奏音さんの母は四冠の綿谷未由子さん

幼年2位となった綿谷奏音さんは一般一部で優勝した未由子さんの長女。全国大会初出場で1番スタート、「自分のことより緊張して、吟友に手を握ってもらいながら聴いてました（笑）」（未由子さん）。奏音さんは「楽しかったけど（優勝を逃して）悔しい。来年は優勝したい」とリベンジを誓う。未由子さんは「幼年、少年、青年、一般一部と優勝できたので、来年から少壮吟士に挑戦したい」と親子で次のステップに進む。

1番スタートの奏音さんは身長120cm以下で、台に乗って吟詠。青年優勝の本田さんは186cmで70cm近い身長差、逆にマイクを台に乗せて調節した

令和四年度全国吟詠コンクール決勝大会

開会セレモニーでの国歌斉唱と財団会詩合吟は、感染防止対策の一環として黙唱で行われた。最前列は審査委員の先生方

昨年はコロナ禍のために地方予選ができず、推薦で出場する地区もありましたが、今年は吟詠コンクールの近畿地区大会が中止、近畿勢は欠場ということに。昨年は28人が出場、うち10人が入賞を果たしただけに、残念な事態となりました。

会場となったのは、日本教育会館・一ツ橋ホール。開会セレモニーに続き9時55分に競吟開始。溌剌とした幼年から少年、青年、一般一部と年齢が上がるにつれ、吟も落ち着きが増してきますが、幼少青年とも優勝したのは男性吟士。少壮吟士など吟界の女性上位が伝えられるなか、将来に期待を持たせる結果となりました。

午後からは一般三部と二部。さすがに年輪を感じさせる円熟味あふれる吟が続き、会場を埋めた観客も聞き惚れます。幼少青年とは逆に一般は3人とも女性吟士が優勝の栄冠に輝きました。

心配された台風14号の影響ですが、欠席者は剣詩舞6人、吟詠13人。遠方から来た方の中には飛行機の欠航などにより延泊を余儀なくされたケースもありましたが、大会はつつがなく進行して無事に終了しました。

全国吟詠コンクール決勝大会結果

一般一部

1位	綿谷未由子	（三重）
2位	阿部香織	（東京）
3位	荒﨑春奈	（神奈川）
4位	太田武志	（千葉）
5位	山田美和	（広島）
6位	小笠原千洋	（静岡）
7位	中澤 宏	（茨城）
8位	板東有希	（徳島）

一般二部

1位	髙橋恵子	（福島）
2位	木戸頌子	（広島）
3位	西 京子	（福島）
4位	東原 恵	（香川）
5位	瀧下和雄	（高知）
6位	赤塚善夫	（愛知）
7位	尾方美千代	（熊本）
8位	鳥居絹子	（愛知）
9位	清原厚子	（大分）

一般三部

1位	中村利江子	（香川）
2位	寺井修三	（長崎）
3位	圖子美知代	（香川）
4位	金堀孝行	（広島）
5位	坂倉一成	（三重）
6位	草薙賢三	（香川）
7位	児玉春雄	（島根）
8位	津村恵子	（長崎）
9位	野間澄子	（広島）
10位	渡辺良夫	（岐阜）

幼年の部

1位	岩永克衛	（長崎）
2位	綿谷奏音	（三重）
3位	阿部楓生	（東京）
4位	菊井凜人	（東京）
5位	西村愛依莉	（高知）

少年の部

1位	鈴木愛琉	（群馬）
2位	原田愛子	（大分）
3位	柴本佳乃愛	（愛知）
4位	前田紗那	（広島）
5位	佐藤亨志郎	（大分）

青年の部

1位	本田陽彦	（福岡）
2位	大野統也	（愛知）
3位	伊達佳内子	（東京）
4位	浅井紗弥	（東京）
5位	平岡大輝	（広島）
6位	澁田知佳依	（広島）
7位	本城愛実	（大分）

幼年少年ではマイクの調節を補助。またコロナ対策として、一人終わるたびにマイクを拭く作業が行われた

審査委員講評

徳田寿風 審査委員長

「年長者の皆さんは魅力的な声で吟じられていましたが、年齢のためか後半崩れた方もおられたので、力の配分を考えてください。母音の発声もよくなってきていますが、年少者の中にオがアに変わるなどの癖がある人がいたので注意していただきたい。詩心については素読百遍で、何度も詩文をゆっくりと読んでください。月刊『吟剣詩舞』の最終ページにコンクール指定吟題の解説を載せているので、それもよく読んでください。専門の委員が採点した発音については、年々良くなってきて練習の成果がうかがわれます。調和はむずかしくてAランクはいません。良かったのに入賞できなかったという方はビブラート、ユリを入れすぎて不安定ということもあるので注意してください」

河野正明 特別審査委員

「一般三部が始まると詩吟らしさが強まって、ほっとしました（笑）。しかし最近では三部の方でも音程やアクセントにこだわりすぎて、個性が薄くなっている傾向があります。現在、YouTubeで往年の名吟詠家の吟も流していますので、そうした昔の個性豊かな吟を聞いて、耳の肥やしにしてみてください」

“聖地”笹川記念会館を離れて

今年の開会の挨拶で沼崎富会長が「吟剣詩舞界の甲子園的な存在」と紹介した笹川記念会館国際ホール。昭和50年に竣工されて以来、全国コンクールや少壮コンクールといった財団主催の主要大会の舞台となり、まさに聖地でした。しかし老朽化により建て替えとなり、今年3月の少壮コンクールが最後の開催に。今回は剣詩舞が東京都北区の赤羽会館・講堂、吟詠が東京都千代田区の日本教育会館・一ツ橋ホールと、分散開催となりました。来年度については吟詠は同じですが、剣詩舞は大阪府門真市の門真市民文化会館ルミエールホールで開催される予定です。

吟詠コンクール、幼年・少年・青年・一般一部の表彰式。来年も同じ会場で開催される

左:剣詩舞会場、東京都北区の赤羽会館・講堂
右:吟詠会場、東京都千代田区の日本教育会館・一ツ橋ホール

新少壮吟士認定証授与

吟詠コンクールの昼食休憩の間、新少壮吟士に対する認定証授与式が行われました。これまでは全国吟剣詩舞道大会にて実施されましたが、今年は春に開催されたために代替処置となりました。少壮吟士は全国少壮吟詠家審査コンクール決選大会(少壮コンクール)で3回入選を果たし、少壮吟士候補特別研修を無事終了してはじめて認定。その栄誉を称えるとともに心技合わせての今後の精進を期待して認定証が授与されます。今年は牛島玲豊さんと大森麗禎さんの2人が少壮吟士に認定、沼崎富会長より賞状額と記念品が贈られました。

牛島玲豊(左)、大森麗禎(右)新少壮吟士。期せずしてお揃いのような着物での授与式となった

沼崎富会長から少壮吟士認定証と賞状額を渡された2人。賞状額の質量的な重さとともに、少壮吟士の責任の重さも痛感する瞬間

牛島玲豊(福岡) 豊晃吟道会

「7月の吟道大学も緊張しましたけど、8月の少壮吟士候補特別研修会はまた別次元で。本当に不安が心の中で大半を占めていました。今日ももちろん緊張しましたけどこれが本当に新しいスタートとして、先輩方を見習って課題に向き合いながら、精一杯頑張りたいと思います」

大森麗禎(愛媛) 清吟堂吟友会

「入賞してから半年経ちますが、実感がなくてずっとふわふわした感じでした。それが今日重い賞状をいただいて、本当に少壮吟士になったんだと改めて思いました。コンクールがコロナ禍で中止になるなど目標を失いかけたこともありましたが、私にとって貴重な期間だったと思います」

少壮吟士会次期会長に就任が決まった八代光晃子少壮吟士に聞く

8月27～28日にかけて、愛知県の勤労青少年水上スポーツセンターにて少壮吟士夏季特別研修会が開催されましたが、その席上少壮吟士会次期会長に宮崎県の八代光晃子少壮吟士が選出されました。伊藤契麗現会長が今季をもって少壮吟士を卒業するため、少壮吟士総会において次期会長の人選を討議。現在西日本少壮吟士会会長を務める八代光晃子少壮吟士に白羽の矢が立ちました。コロナ禍で吟剣詩舞界も厳しい状況が続くなか、どのように舵取りして活性化を図るのか、抱負を語っていただきました。

「少壮吟士一人一人が努力して、憧れの存在を目指す」

第二十三期
八代光晃子(やつしろこうこうし)
淡窓伝光霊流
宮崎県

——少壮吟士会次期会長ご就任おめでとうございます。まず抱負をお聞かせください。

突然のことでびっくりしていますが、本当にいつの間にかこんな歳になったのだなというのが正直なところです(笑)。とにかく少壮吟士会、そして吟剣詩舞界の発展のために微力ながら力を尽くしたいと思います。

——ここ数年、コロナでなかなか思うような活動ができない状況ですが?

大会が中止になるなど、一般の方々に吟剣詩舞に触れていただく機会が少なくなっていますが、その中でいろんな形で吟剣詩舞はこういうものなんだということを、多くの方に知っていただけるよう、普及振興に努めないといけないと強く思っております。

——具体的にはどのような方法を考えておられますか?

大会ができないのであれば、YouTube等を使って少壮吟士として皆さんに吟詠を聴いていただくというのがてっとり早いかと思います。これは各地区の少壮吟士会でもやってきていて、私たち自身もかなり慣れてきました。吟剣詩舞にたずさわってない方にも「こういうのが詩吟なんですよ」と宣伝になりますし、気軽に楽しんでいただく。あまり長い番組でなくて5分程度の番組であれば、十分ご覧いただけると思います。

——指導者の立場としますと、高齢化とともにコロナにより吟詠人口も減少していますが、これを盛り返す方策はありますでしょうか?

コロナ禍で教室に来てお稽古すること自体がむずかしいですが、やはりご高齢の方が多いので、ご自分が来たくても家族に反対されるというケースもあります。それで「もういいかな」と諦めてしまう方もいらっしゃるのですが、コロナが収束しないとなかなかむずかしい問題です。ただようやくコンクールも開催されるようになってきたので、皆さんの励みになる状況にはなってきているかなと思います。

——今回の研修会でも「最近の少壮吟士は個性がない」というような話も出ていますが、少壮吟士のレベルに関してはどうお考えですか?

それを言われるとつらいところなのですが、かと言って個性的な吟が良いかと言うと、それもむずかしいところです。とにかく自分で勉強していくしかありません。ここで教えていただいたことも、もう一度自分の中でよく理解を深めることが大切。そして自分だけにとどめずに、帰ってからお弟子さんなどへの指導に役立てることが重要です。それによって自分の吟力の向上にもつながると思います。

——少壮吟士は笹川鎮江二代会長が「吟界のスターをつくる」という熱意により生まれましたが、子供たちなど吟詠家の憧れの的であり続けてほしいですね。

それはありますね。「ああ、あんなふうになりたい」と思わせるような吟ができればいいなと思います。それには少壮吟士一人一人の努力が必要。そして子供たちにはただ詩吟を教えるだけでなく、「礼と節」の精神で礼儀作法から学んでいただければ。少壮吟士はそういう面でも模範になる存在であることが大切だと思います。

50回目の節目の大会で見事入選を果たし、表彰される9名の吟士。うち4名は3回目の入選で、律詩による特別審査にも合格して少壮吟士候補となった

少壮コンクールと言えば会場は笹川記念会館と決まっていたが、同会館が改修工事中のため、新橋駅から徒歩5分、550人収容のニッショーホールで開催された

コンクール形式の大会としては今年度が最後。次年度からは研修を含めた審査会形式で実施される

日本財団助成事業 第50回全国少壮吟詠家審査コンクール決選大会

最後の「少壮コンクール」で4人の少壮吟士候補が誕生

日時：令和5年3月12日（日）
場所：東京・ニッショーホール
主催：（公財）日本吟剣詩舞振興会

吟界の最高峰、少壮吟士。全国で50人ほどの少壮吟士は、これまで地方予選を勝ち上がったうえで「全国少壮吟詠家審査コンクール（少壮コンクール）」にて3回入選。さらに律詩による特別審査にも合格して初めてその称号が与えられるという、狭き門を通り抜けなければなりませんでした。しかし昨今の吟詠人口の減少に伴い、地方予選もままならない状況となり、次年度からは開催の形式が変更されることに。コンクール形式としては50年の歴史に終止符を打つ最後の大会。その区切りの年にかけた4人が晴れて少壮吟士候補に選出されました。

「全国の少壮吟詠家の日ごろの研鑽を競う場とすると同時に、すぐれた少壮吟詠家選出の公の場とし、吟詠の芸術的向上を図り、あわせて吟剣詩舞道の普及振興に資すること」を目的として、昭和47年にスタートした全国少壮吟詠家審査コンクール。

「少壮コンクール」の通称で親しまれ、「私の時代には全国各地で予選が開催され、決選大会には150人くらいが出吟した」（徳田寿風審査委員長）というまさに憧れの大会でした。

しかし今回予選ができたのは東日本と九州のみ。他は出吟者が少なくて推薦での出場となり、決選大会にエントリーしたのは67名、うち9人が欠場して出吟者は58名となりました。そうなると「全体にレベルが低く、全国大会に出てくるはずではない人もいた」（河野正明審査委員）ということに。

こうした状況に日本吟剣詩舞振興会では、令和5年度からは従来のコンクール形式をやめ、研修を含めた審査会形式（「全国少壮吟詠家選考審査会」）に移行することにしました（4月号24ページ参照）。

第50回という記念すべき節目の年が最終回となった「少壮コンクール」。しかし今回までの入選の実績は、来年度以降の審査対象となります。

そのためこれまで全国吟詠コンクールで優勝を果たした吟詠家数人が初めて少壮コンクールに挑戦。第1回目の入選を果たした5人のうち、吟詠スーパーチームのメンバーでもあった井戸隆裕さんは幼年・少年・青年の部、荒﨑有紀江さんは青年と一般一部、綿谷未由子さんは幼年から一般一部まですべての部門で優勝経験あり。3人とも初出場にて最後の少壮コンクールのレベルアップに貢献しました。

審査委員長講評
徳田寿風審査委員長

「失格がなかったのは良かったですが、三つほど感じたことがあります。一つめは少壮コンクールとしては幼稚な吟が多かったこと。大人らしくしっかりこぶしを回してほしい。二つめはもっと詩心表現に力を注いで頂きたいということ。もう一つは態度など舞台マナー。詩文のメモは肘を上げずに、体と一体になるように自然に持ち、もう一方の手も不自然にならないように。2分間自分を演出することに注力してほしいです」

審査委員講評
河野正明審査委員

「全体の結果としては非常に良くなかった。上手なはずの人が、緊張のためかお腹に力が入らず失敗している。緊張している時は「何とかしないと」と思わずに、むしろ「あきらめる」ことが大切。「入選は無理そうだから失格しなければいいや」と目標を低く設定する。そうすると肩の力が抜けてうまく行ったりします。一度試してみてください」

晴れて少壮吟士候補となった4人。左から野上孝時、榮葉子、西岡佐智世、恒成育香各少壮吟士候補

1回目(下の5名)と2回目(今回は該当者なし)の入選者が発表されたあと、いよいよ特別審査者の発表。

今大会にはこれまで少壮コンクールで2回入選を果たし、王手をかけていた7人がエントリー。1人が欠席して6人が出吟しましたが、うち5人が上位10位以内となり、特別審査に出場することに。

すぐに特別審査用の律詩の抽選が行われましたが、課題吟は五題なので、全員違う律詩が振り分けられます。

特別審査に臨んだ5人中4人が合格

かつて特別審査まで来ると失格にならない限り大丈夫という雰囲気もありましたが、第47回大会では7人中4名が、失格ではないものの少壮吟士候補に選出されないという厳しい結果に。

そのため5人とも気を抜くことなく吟じましたが、その緊張感のためか『帰省』に挑戦した平野千草さんが序盤に絶句。一般審査を含めて唯一の失格者となり、第47回大会に続き、またも特別審査で涙を飲むことになりました。

野上孝時さんも第47回大会の特別審査で落選した一人。「詩文を見なくて詰まってしまいましたが、同じ失敗をしないよう注意しました」と今回は見事に詠い切ります。

最終審査委員会議後の審査結果発表では、失格しなかった4人が合格。晴れて少壮吟士候補となる栄誉をうけた4人と、1回目入選をして来年度以降の少壮吟士審査会にかける5人が晴れやかな表情で賞状を受け取り、最後の少壮コンクールの幕が降りました。

1回入選

日本詩吟学院岳智会
阿部香織(東京)
『芳野に遊ぶ』

淡窓伝光霊流臼杵詩道会
吉田あゆみ(大分)
『豊公の旧宅に寄題す』

吟道関心流三重県本部
綿谷未由子(三重)
『越中覧古』

詩道楠水吟詠会
井戸隆裕(大阪)
『海南行』

紫虹流吟剣詩舞道会
荒﨑有紀江(神奈川)
『絶命の詞』

3回入選 少壮吟士候補者 喜びの声

淡窓伝光霊流中津詩道会
恒成育香(大分)
『従軍行』(乾隆帝)
特別審査『九月十五夜』(菅原道真)

「この(表彰式の)場にいることが信じられない気持ちです。父が詩吟をしていた関係で小学4年生の時から始め、全国コンクールでは平成22年度に青年の部で優勝しました。少壮コンクールは42回大会で入選した後、子供を出産したので5、6年出場せず、一昨年に出て2回目入選しました。昨年は入選できなかったのでとてもうれしいです。『従軍行』 が当たった時は、強吟が好きなので「やった!」と思いました(笑)。聴いている方に感動していただけるような、詩心を届けられるような吟士になりたいと思います」

日本詩吟学院岳陽会
榮 葉子(沖縄)
『中秋月を望む』(王建)
特別審査『山中の月』(真山民)

「43回、44回で連続入選しましたけど、その後教育の管理職試験を受けて教頭・校長として忙しくなるとともに、コロナ禍のために出場できなくなってしまいました。県外に出られるという状況ではなくなりまして。1月で55歳になって来年までしか出られなかったのですが、節目の50回大会で大きな賞をいただいて感無量です。吟題は両方とも月が付いていて、まさにツキがある感じでした(笑)。先輩の少壮吟士の方たちにいろいろ学びながら、日本の良さを表せるような、詩心をしっかり表現できる吟士を目指して頑張りたいです」

緑崇流吟道緑水吟詠会
西岡佐智世(大阪)
『中秋月を望む』(王建)
特別審査『大楠公』(河野天籟)

「子供の時から詩吟を始めて、第一期少壮吟士の奥薗緑水先生に師事しましたので、先生と同じ少壮吟士の候補になれて非常にうれしいです。全国コンクールでは少年、青年、一般一部で優勝しましたが、家庭の事情等で少壮コンクールに出たのは40代半ばになってからです。12月にコロナになって声が出なくなり、エントリーの時に不安になって8本から7本にしましたが、大好きな『大楠公』でも声が出て良かったです。得意不得意ではなくどんな吟でも詠えるように、マルチに何でも詠えるように頑張っていきたいです」

吟亮流吟風会雪朋支部
野上孝時(栃木)
『酒に対す』(白居易)
特別審査『筑前城下の作』(広瀬淡窓)

「15年くらいかかってしまいましたが、周りの皆さんに何とか顔向けできてひと安心です。第47回の律詩では気持ちよくなって詩文を見ずに詠っていたら詰まってしまいました。今回は同じ失敗をしないように気をつけましたが、『酒に対す』はかなり普通に詠ってしまったので、律詩は感情込めて詠うように心がけました。教師をしている関係でコロナ禍ではコンクールに出られなかったのですが、久々の舞台でいい結果になってうれしいです。これからは何か人にないものを持って、自分らしい良さを表現したいと思います」